



家族・近所に代わる組織を

高齢者支援

高齢者だけで暮らす世帯が急速に増えている。かつては家族や親族が高齢者の生活を支え、隣近所の住民も連帯し、生活困窮者には行政がかかわった。つまり血縁と地縁、行政の三者が形成する支援の三角形の中心に高齢者はいて、三方から見守られる安心を得ていた。だから、孤独死もまれだった。しかし今日では「無縁社会」と言われるまでに、これらの機能は弱まっている。

私は静岡県藤枝市で民生児童委員を務める中で、地縁力の低下を実感してきた。集合住宅が増え、戸建て住宅も堅牢化し、プライバシーを守るうとお互いに干渉を避ける。近所に救急車が止まっても窓からのぞくだけ。近くの家が高齢者を狙った詐欺的商法の舞合になっていても無関心を決め込む。

こうした地縁の衰えを補おうと、月2回の巡回活動の合間に高齢者を病院へ送迎したり、特別養護老人ホームへの入所申請に同行したり、障害者手帳や年金の申請で役所と折衝したりしてきた。しかし、入院や施設入所時の身元保証まで背負い込むとなると、個人の力の限界を感じてしまう。

そんなとき、名古屋に本部を置くNPO法人「きずなの会」の活動を知った。身寄りのない高齢者や障害者を会員とし、その預託金をもとに24時間態勢で身元保証や入院・手術

の付き添いから葬儀や納骨まで、家族に代わっておこなう。私自身、子どももない高齢者世帯で、お墓を求めても寺から断られた経験があり、家族に代わる組織の必要性を強く感じていた。そこで、多くの協力を得て2008年12月に「きずなの会静岡」を設立した。

それから1年あまり、早朝の緊急呼び出しで家に駆けつけ、脳血栓で倒れた会員を救急車で入院させたこともある。がんを患う高齢者を身元保証して入院させ、手術に立ち会ったり、生活保護を受けている会員の転居のために身元を保証したり。葬儀や納骨に心配がいらぬことを知って、ほととずする人も多い。いずれも子どもがいなかったり、きょうだいも高齢化していたりして血縁的支援を得がたい人たちである。活動は次第に地域に浸透し、会員は約40人と当初見込みの2倍に達した。

だが、この活動も孤独死までは防げない。血縁の薄さを家族代行のNPO法人が補うように、衰えた地縁を補うため、地域に根ざしたNPO法人が各地に生まれることが強く望まれる。

ボランティアグループが一体となつて週4、5回の高齢者宅の巡回訪問と心のケア、高齢者専用の食事、とくに夕食の配食サービス、買い物代行、病院への車での送迎などの活動を展開する。法人の立ち上げには、地域の実情をよく知る民生児童委員が中心となつてかかわることも重要だ。

血縁、地縁を代行する組織が行政とともに高齢者を見守る新しい三角形を形成すれば、高齢者は再び安心を手にすることができると思う。